



報徳会館での「感謝の集い」と謝辞を述べる草山昭代表理事

報徳博物館開館40周年記念 感謝の集い 草山昭代表理事－概要報告と開館秘話回想

報徳博物館は令和5年(2023)10月1日をもって開館40周年を迎え、12月3日(日)午後、報徳会館に80名余の関係者のご出席をいただき「感謝の集い」を開催しました。公益財団法人報徳福運社の草山昭代表理事が、開館以来の厚いご支援、ご厚誼への謝辞を述べ、40年間の活動と環境の変化への対応について概要を報告、博物館建設当時の経緯を知る最後の証人として、経団連土光敏夫名誉会長の陣頭指揮による建設資金賛助支援にまつわる秘話が披露されました(本文にて紹介)。次いで鷺山恭彦大日本報徳社社長とさがみ信用金庫佐藤孝之常務理事から激励の祝辞をいただいた後、さらなる発展を期して皆様から祝杯を受けました。また、博物館地下ホールにおいては、小島直画伯から寄贈された『絵本きんじろう』の三十数点に及ぶ原画展を開催し、ご参観の皆様には生き生きとした尊徳の伝説・偉業のイメージに触れていただき、感銘を新たにいただけたかと思われます。

開館40年の歩み概観と10年編期の動向

《40年の歩み概要》

来館者は、開館以来緩やかながら着実に増加してきました。近年は小中学生の学習、企業や団体の研修見学の恒例化が定着しています。当年までの入館者総数は約14万人、2023年の入館者数は、週4日の開館で1706人、月平均で142人です。

基本業務の資料の収集と収納は、小田原報徳二宮神社資料をはじめ二宮本家、同四郎氏、精三氏、及び門人の富田高慶や福住正兄、福山瀧助あらいわ仕法指導を受けた剣持家他の人々、さらには近現代の報徳研究者からの資料、蔵書等の寄贈、寄託を受け、新たに調査収集した分もあわせ適切条件下での整理を進めてきました。収蔵資料約1万600点（その一部は当初段階で神奈川県重要文化財資料に指定）、蔵書は約2万8千700冊になります。その成果は地下ホールの年次特別企画展で紹介し、研究者へも開示提供されました。

3階研修室では一般市民を対象に月例の「報徳ゼミ(591回)」や「古文書に親しむ会(335回)」の講座を開催、また「友の会」の組織により「友の会だより(107号)」(現在「報徳博物館だより」8号)を刊行、尊徳・報徳の遺跡をめぐる年次のバス見学会も開催してきました。また新聞、テレビ、雑誌等のマスコミにおいては、近年二宮尊徳や報徳関連の話題が多く取り上げられ、その都度信頼すべき情報提供者としての役割を果たしてきました。

《10年編期で見た変化》

○第1期 1983/10/1～1993/9/30

貴重資料の刊行と尊徳生誕200年祭の開催
当初は、神奈川県の文化財指定の準備、『二宮尊徳関係資料図鑑』(1990)や『報徳博物館資料集1 尊徳門人間書集』(1992)などのほか、貴重資料の編集刊行を優先的に進めながら、「二宮尊徳生誕200年祭」への行事協力と記念事業映画『東西南北〇に候』を製作しました。また日本の経済繁栄の一因とされる「報徳」視察のため、タイ国やハンガリーなど外国の政治行政の要人の来館が相次いだ時期でもありました。



博物館2階常設展示室



北京清華大学大会

○第2期 1993/10/1～2003/9/30

バブル崩壊による経営危機と国際二宮尊徳思想学会(INSA)の発足
前期に続き寄贈・寄託資料の受入れと保全整理、刊行を継続する中、1990年のバブル崩壊による経済不況で、当館も経営人員縮小を余

儀なくされました。一方戦後日本経済発展の要因調査で北京大学劉金才教授が来館、これを契機に国際二宮尊徳思想学会が成立、日中両国で学術大会の隔年開催が実現しました。

○第3期 2003/10/1～2013/9/30

報徳留学生受け入れと公益財団法人への切替え
前期に続きINSAは第2回大会東京新宿区の日本青年館(2004)、第3回大連民族学院(06)、第4回上海華東理工大学(08)、第5回京都産業大学(10)、第6回北京清華大学(12)、第7回明治大学(16)、第8回曲阜師範大学(18)の順で開催。これに連動して短期(6ヶ月)留学制度を設け、主に中国から大学教授、准教授、講師、大学院生を対象に、報徳研究と日本文化に親しむ機会とし、計30人を受入まし

た。同時に留学生を講師とする「中国を知ろう会」の月例講座も開設、150回を重ね一般市民聴講者からも喜ばれました。学術分野では、2004年から機関誌『報徳学』を17号まで刊行、また折にふれ関係機関との交流も深めました。体制としては国の財団法人制度見直しにより、2013年10月1日から公益財団法人への変更となりました。

○第4期 2013/10/1～2023/9/30

コロナ感染症対策と全館的な施設メンテナンス
当館も築30年余、修復刷新の急務の課題として2019年に展示会場の全面リニューアルを果しました。まもなく世界的なコロナ感染症問題が発生し、国の要請による長期休館(2020)も再三に及び、経済的な苦境も避けられず、INSA開催や留学生制度は見合わせ、職員削減により開館は週4日制としました(2021)。一方、長期休館を利用して全館的な改修工事を断行し、周辺の植栽整理も大幅に進め、翌年10月11日に再開館しました。



全館的メンテナンス開始

博物館建設経緯と財界支援秘話

《研究所から博物館へ》

博物館設立への動きは開館7年前、1976年(昭和51)9月19日、小田原市民会館で開催された「二宮尊徳没120年祭記念式典」の大会宣言に始まります。「『二宮尊徳全集』原本を始め、貴重な文献、資料、遺跡、遺物の保全と活用に努め、研究を助長し、優良図書を普及して、この道の真価を中外に顕揚しよう」というものでした。

折しも『二宮尊徳全集』の復刻版出版や、二宮尊徳の資料を神奈川県文化財に指定する動きが進行中で、全国の報徳団体代表や有志からなる報徳振興懇話会は、「二宮尊徳研究所」を構想しました。

1979年2月1日に報徳二宮神社が近隣の富士フィルム所有地を譲り受けて用地を取得、尊徳高弟福住正兄設立の財団法人報徳福運社をその運営母体とします。翌1980年11月17日寄附金の免税処置を考慮して施設を登録「報徳博物館」としました。半年後には実施設計が定まり、工費4億7千万円、総事業費6億7千万円(当初3億円)が算定されました。

翌1982年5月21日には起工式、完成まで1年半足らず。募金協力団体からは中央財界・経団連等への支援要請を勧める提言もありました。

《土光経団連名誉会長への直訴》

当時経団連の土光敏夫名誉会長は1982年からの「臨時行政調査会」の委員長として、政府の抜本的な行財政改革のリーダーでした。佐々井典比古初代館長は「土光さんの発言には報徳的な感触がある、土光邸は自宅の近所なので一度訪ねてみたい」と当時の草山昭事務局員に語ったそうです。

間もなく、予約なしに土光邸の勝手口を訪ね、居あわせた夫人に訪意をつけると「そういうお話なら玄関からお入りください」と土光氏本人の指示があつて即時面談。「まだ尊徳先生の博物館もなかったのか、必要な募金はいくらなのか」と話は一気に

進展、現状の目標額を説明すると「では経団連の会員企業に規模に応じた金額を提示して声をかけてみよう」となりました。10月4日、事務局は財界の募



土光敏夫会長

金体制として「報徳博物館建設賛助委員会」を設置、土光氏を会長とし、募金のまとめ役花村仁八郎経団連副会長をはじめ松下幸之助、永野重雄、小原鉄五郎ほか錚々たる財界代表48氏から委員就任の承諾を得ました。花村副会長からの指示のもと、草山事務局員と担当理事が、各事業別連合団体事務所にお礼の挨拶回りをしたところ、どこも極めて好意的で、財界の報徳に対する親和性が実感されたそうです。かくし

て半年後には2億9千2百万円の募金目標額は達成されました。

《尊徳の教えの徹底を》

開館に先立つ1983年9月27日、報徳会館に二宮家代表はじめ関係官公庁、資金支援や建設、準備等に関わった要人並びに全国報徳関係者代表約四百余名を迎え、記念式典を開催しました。

土光会長はテープカット後の祝辞で「日本は皆様の努力で米国に次ぐ経済

大国になったが、毎年非常な赤字国債を出し、すでに100兆円を超している。大変な問題だ。尊徳先生の教えを政府も国民も本気でもっと勉強していたら、こんなことになるはずはない。今後先生の本当の人格や経済的な教え、人間的な考え方を徹底して広めていただきたい(要記)」と報徳認識の現代的意義を強調しました。

佐々井館長は『かいびやく』開館特集号(S58年11月)の「巻頭言」において「財政基盤の薄弱な一財団が、ほとんど無から有を生ずるような形でこの館を作ることができたのは(中略)、それは結局、二宮尊徳の思想、徳業そのものが今日なお生きていて、その現代的、将来的意義が当路の方々にとらえられたから」で、「報徳博物館を造らせたものは『生きている尊徳』だった」と結んでいます。



新築の博物館に入る土光会長(中央)と案内の佐々井館長(左)

ハンサム金次郎シリーズ⑧ 六浦小学校の石像金次郎 校庭を見守って90年

中世には交易の港、近世は金沢八景の一景をなした六浦。今は市街地化された一画に六浦小学校があります。学制施行の明治6年(1873)、寺の本堂で発足後、侍従川治いに校地を求め、関東大震災後現在地に再移転、令和6年(2024)の今年に創立150周年になります。記念紙の年表昭和9年の項には、「小泉又次郎通信大臣より二宮尊徳像が寄付される」とあります。以来90年、金次郎の石像は校庭向きにどっしりと立ちつづけてきました。像高105cm 幅40cm 台座高さ約1m、児童の視線でも間近

に面相に親しめる高さで、目立つほどの風化摩耗も感じられません。台座正面には「二宮尊徳尊像」、脇面には「昭和九年五月小泉居士」と陰刻され、地位肩書の記載はありません。



大礼服正装の小泉又次郎翁(宝樹院提供)

小泉家の菩提寺宝樹院で同家の墓石整備を手がけている地元の岩沢石材店では、確証はないが小泉家御用の経緯から「あの金次郎像は当店で納めたもの」と認識している由。

小泉又次郎(1865~1951)は地元六浦荘の出身、小泉純一郎元首相(低学年時当校に通学)の祖父です。伝記によれば、横須賀軍港の人足手配師の家業を継ぎ、荒々しい現場を仕切りヤクザを排除してから政界に進出、明治41年衆議院議員に当選。野人を自認するも昭和4年浜口内閣に乞われて通信相、続く若槻内閣でも同相に、同9年横須賀市長、12年立憲民政党幹事長を歴任、最後は昭和20年貴族院勅選議員に推されました。

背中に俱利伽羅龍の総刺青があったため、新聞で一時刺青大臣とはやされましたが、これは当初の家業に徹して港を安泰に導いた証。社会の底辺の実態にも通じていた又次郎は義侠心旺盛で、「貧乏人への選挙権付与は国家反逆」とする貴族院に

猛反発。大正9年の普通選挙法推進運動のリーダー格となった時、仕掛けたデモが警官の抜刀鎮圧騒動となり、社会主義者、危険分子として指弾されました。

回想によると「特権階級を正義平等の一線に引き下ろし、下層階級をその一線まで引き上げ、両者の均衡と握手の間に幸福なる社会、健全なる国家を」期待したようです。報徳との接点は不明ですが、独自の政治的一円融合観にも見えます。普通選挙法推進期の大正8~9年頃には、報徳界から神奈川県社会課長に転じた佐々井信太郎のもとで、港湾労働者を含む弱者への給食、宿舎提供など画期的な福祉対策が実施され、また金次郎像寄贈の昭和9年前後には、教育界に報徳実践運動が盛行し、学校金次郎像設置ブームとなっていました。



校庭を見守る金次郎像



風雪に耐えて石造金次郎像

開館案内

現在、開館日・開館時間は以下の通りです

●開館日：毎週4日 土・日・月・火曜日(水・木・金曜日及び祭日代休日、年末年始夏休み、メンテナンス期間は休館となります)

●開館時間：9時30分より16時30分まで

*なお、団体の場合、前もって申し込みがあれば開館対応もいたします。

発行 公益財団法人報徳福運社

報徳博物館

〒250-0013 小田原市南町1-5-72

電話0465(23)1151・振替00230-6-49044